

# 彙報

一九九一年度

## 東海大学文明学会大会

一九九一年十月二十六日、東海大学湘南校舎松前記念館において、第十回大会が開催された。まず総会において会計報告および活動報告が行われ、それぞれ承認された。齋藤博、中川久嗣、保坂幸博各先生によるシンポジウムの後、東京大学教授後藤明先生による特別講演が行われた。西アジアにおいて発達した文明が、人類文明に対していかに重要な役割を果たしてきたのか、また、イスラーム都市がヨーロッパの都市とどのような意味で異なっているのか、約二時間にわたって御講演頂いた。文学部教職員をはじめ、多くの学生が参加し、終了後、松前会館にて懇親会が行われた。

シンポジウム

テーマ 現代フランスにおける文明論

東海大学教授 齋藤博氏

非常勤講師 中川久嗣氏

保坂幸博氏

特別講演

イスラーム文明とヨーロッパ

東京大学教授 後藤明氏

一九九一年度

## 東海大学文学部文学科秀作卒論発表会

一九九一年六月二十四日、東海大学湘南校舎松前記念館において、第八回秀作卒論発表会が開催され、一九九〇年度に文学部各課程に提出された卒業論文の中で、最も優秀な論文の発表が行われた。

日本課程 井上香奈子

「祭りの構造と変化―妙高山関山神社（火祭）の事例から―」

東アジア課程 石井万里子

「秦漢時代における儒墨の再評価」

西アジア課程 比留川あゆみ

「ムシャッター宮殿にみる初期イスラームの装飾文様」

東欧課程 羽田直美

「Unia Lubelska に見る国家意識と統一体」

西欧課程 斉藤太郎

「中国とヨーロッパの交流―デルフトと景德鎮における陶磁器紋様の交流と変遷からみた文化変化の一考察―」

尚、南アジア課程の発表は、発表予定者の急な事情により、今

回は行なわれなかった。

## 一九九一年度文明学会例会

五月例会（五月二十七日）

西方明雄（文学部西アジア課程三年）

「ソ連邦におけるイスラムの位置——人口問題から見る——」

谷田部奈生（大学院文明研究専攻修士課程）

「モルダヴィアにおける教会美術——ビザンティンと西方の

影響——」

六月例会（六月十四日）

清水直美（大学院文明研究専攻修士課程）

「ペルシア語の成立——アラビア語との関係を中心に——」

原 康人（大学院文明研究専攻修士課程）

「メキシコ神話についての考察」

七月例会（七月八日）

田中克枝（大学院文明研究専攻修士課程）

「排除の対象としてのシャーマニズム」

山花京子（大学院文明研究専攻修士課程）

「古代エジプトのパンとビール作り」

十月例会（十月十八日）

藤浪康明（大学院文明研究専攻修士課程）

「スパルタのヘイロータイについて」

柳田利明（大学院文明研究専攻修士課程）

「ドールリグ（モンゴル・ヘンタイー県・バヤン・アズラガ）

墳墓群の調査報告」

井野上眞弓（大学院文明研究専攻修士課程）

「立川流の『女性認識』——日本中世における「女性性」の

形成と現代的継起——」

十一月例会（十一月十五日）

小川景子（大学院文明研究専攻修士課程）

「ギリシャ古典文学にみる怪物の存在意義——ヘシオドスの

系譜の場合——」

竹中宏子（大学院文明研究専攻修士課程）

「社会変動とエスニシティ——スペイン・アンダルシアを通

して——」

## 一九九一年度大学院文明研究専攻修士論文題目

### 文明研究専攻

阿部 修 王禎『農書』を中心とした中国水車考

一條 佳子 一八世紀のプロヴァンスにおける祝祭の諸様相

竹中 宏子 エスニシティ、国民国家、そして社会変動——ア

ンダルシアにおけるエスニシティの現状——

中山 周治 一九世紀のマオリ部族の識字問題

一九九一年度文明学科卒業論文題目

文明日本課程

秋田 一郎 日本人のスペイン観の変遷

池上麻由子 永井荷風の都市意識——パリと東京の都市空間——

梅屋 孝男 統一協会に入信していく若者達に対する一考察

大平 一次 チャールズ・ワグマンの『ジャパン・パンチ』

研究——近代日本文明の姿を求めて——

梶 圭一 一休宗純の禅思想

岸山 毅 大山の夏山祭と秋季大祭

呉 昌美 福沢諭吉の文明論について

小戸田雅子 我が国における女性自立運動の一考察——平塚ら

いてうを中心として——

小林 知子 「五族協和」からみた民族観——満州建国のイデ

オロギーと現実——

斉藤 新一 米軍による日本本土爆撃のねらい——横浜大空襲

を中心にして——

齋藤美穂子 明治維新と日本人の思想的転回——森有礼の場

合——

重田 順二 村上春樹のニヒリズム——評論家の村上論を参考

にその原因を探る——

清水 陽子 庶民文化都市「浅草」——歴史・文学作品を通し

白石 哲也 近代国家建設に尽力した旧幕臣、榎本武揚につい

て

末永 敏則 文学作品の中の浅草——浜本浩の作品を通して——

清田 茂 中世武士団の土着思想に関する一考察

高橋 恵介 桐生機業の産地分化

立花 路代 百姓一揆からわかる百姓意識

立野 智恵 富山県福光町の入家儀礼

玉村 知子 わらべ歌の意味不明さについての一考察

土屋 和子 『先祖の話』における柳田國男の祖霊の見方

外山 素裕 岩倉使節団が見た西洋文明の中の教育

中川 倫子 平安女流日記文学に見られる男性観

中村 毅 伝統酒造地灘の変貌

長塚貴布衣 謡曲の中にみられる仏教的要素

成谷 眞吾 天理教の発生の要因と過程

橋谷竜太郎 紡績女工と結核

原 美由紀 友禅染の発展をたどって——文化史的考察——

平島 和仁 近世畿内の綿作に関する一考察

細野 恭子 スカーフ生産における捺染技術の発展

前田 祥子 大分県における過疎化の進行と地域類型

松山 英介 神と信仰——江島神社とその信仰——

宮島 忠博 八王子機業におけるネクタイ製造業の変貌

森田そよ香 文明開化がもたらした捕物帳

山崎 由美 川崎臨海工業地域の変容

山科 篤司 永井荷風と下町——小説『すみだ川』を通して——

山野 泰治 江戸川・中川河間地域における水塚

吉野 雅巳 石神井川流域の都市化と治水

渡辺 貴晴 相模原市の地蔵像の建立と生業の関連性——地蔵の機能を中心として——

近藤 大介 日本の捕鯨社会——商業捕鯨モラトリアム実施におけるその影響について——

辰野 広茂 諏訪の地における御柱祭

新井 浩司 明治初期のホテルと日本西洋化

飯田源太郎 子ども組からポロイスカウトへ——現代社会における子ども集団——

池田 親史 戦乱南北朝における楠正成像

牛田 篤彦 原三溪と近代日本画壇

浦野 建二 江戸後期常総地方における技術者の活動——飯塚伊賀七をめぐる——

江澤ゆきの 近世百姓一揆の思想——日常生活と非日常世界の連続性——

太田 隆彦 鍬の分化とその時期

大前真帆子 日本における女性髪型風俗——鬘の起点を探る——

長田 幸廣 新興宗教立正佼成会が果たす役割

金子 美穂 修学旅行・その多様化の方向

川崎 朗子 『一遍上人絵伝』に見られる女性像

桐山 明伸 多摩川水害訴訟における住民と行政

栗原 英之 敵討ち考 検証鍵屋の辻の決闘

小林 恵子 横浜、川崎地域における公団住宅の立地変容

小森 茂 第二次世界大戦と東条英機

齋藤 美帆 山の神と供え物について

阪口 和良 近世における商品作物生産と肥料——『農業全書』と『広益国産考』を対比して——

佐藤なほ子 横浜接収——戦後復興・発展への影響——

塩谷佳奈子 千利休とその茶の湯——日本の喫茶様式の集大成——

篠ヶ谷路人 静岡県内における埋甕について

白石 明美 結城における機業の集積と地域分化

杉山 俊子 「コックリさん」からみた現代日本の靈魂観

高橋夕香子 箸と日本人——日本人にとって箸とは何か——

竹村 英史 茅野市における寒宿の変貌

立里 光弘 地方産業における特産品の意義——天童の将棋駒をめぐる——

土田早千江 近代日本の「モダン」生活考——大正末年から昭和初年代の現象として——

出口 育 波カシ族のエスノグラフィ

殿塚 幸雄 説話における鬼の存在

土橋 利行 柿田川湧水と環境保護運動

中原 理子 『上毛教界月報』における日露戦争——キリスト

教信者の非戦論——

長岡真由美 わが国における余暇活動の現状と伊豆リゾート開

発の問題点

成島 浩子 商家正面の装飾部分の歴史と意味

橋本 正明 「河原巻物」における特権と権威付け——「河原

巻物」に秘められたもの

林 裕見子 横浜の近代建築にみる政治と経済

福井 佳 当麻蹴速と野見宿禰 相撲観の地域差

藤田 朋子 粥の象徴性に関する民俗学的考察

堀内 満浩 先端工業の進出と農村地域の変容——山梨県御坂

町とA社の事例——

馬田 一義 近世における筑後川中流域の農業水利

松村 成美 現在における死の偏在について——マスメディア

にみられる自殺報道——

馬巻 宏房 埼玉県南地域における蔬菜生産地域の成立

向笠 深雪 斬首刑の歴史と山田浅右衛門

靱山 幸代 南西諸島の来訪神——本土との比較とその歴史的

背景——

柳生 琢荘 広島県における農業地域構造の統計分析

山崎 光子 朱子学における西洋技術の理解

山下 貴子 天狗の存在意義とその変遷

山田 一彦 兵事と軍事——荻生徂来「鈴録」について——

横山 千絵 叡尊・忍性の慈善救済からみた非人社会の現実

渡辺 裕之 近郊都市商業地の現状と再編成——相模原市・藤

沢市・厚木市を例として——

許 麗玲 台湾における婚姻と産育の変化

鄭 令瑜 台湾の宗教と儀礼

山田 一郎 長崎の紙鳶揚げ

岡崎 俊也 首都圏西部におけるテニスクラブの立地展開

小澤 裕子 小田原お城まつりにみられる漁業性——漁師と神

興と浜降り祭——

文明東アジア課程

青木 真樹 ゲームスコアから見る朝鮮野球チームの勝敗の要

因についての一考察

秋山 雅史 タイ華僑（華人）の帰属意識（タイの同化の一考

察）

安喰 康子 古代中国に於ける風について

飯田 英明 深圳経済特区——その発展と展望

石塚 有子 商鞅変法の効果と「範圍」について

石野 淳蔵 壬辰倭乱義兵闘争——慶尚、全羅、咸境各道比較

——

石橋 夏穂 日と月に関する神話と信仰について

伏守 修一 中国旅行の前途 中国旅行をどう売るか

伊藤 正和 中国の光華寮問題批判の目的

稲葉 純一 樽井藤吉の日朝関係史論

植松 和子 中国自動車産業の現状と将来

遠藤ゆきえ 中国古代の算盤——漢代起源説の考察——

大石 進二 東亞、同文両会合併時の近衛の発言から——近衛

大坪 今子 篤磨の支那保全論について——

尾形 哲也 香港における銀行制度

小野 公子 朝鮮人被爆者問題

尾上 良平 唐代、明代における宦官——仇士良、劉瑾を比べ

折笠 紀子 広開土王碑の資料研究について

柏原 雄一 北宋山水画に於ける郭熙の功績と「早春図」の役割

加藤 洋子 台湾における土地改革の成功とその原因に関する

一考察

工藤 真樹 毛沢東論の変遷について

小林 由佳 一九七九年以降増加した中国の「人工妊娠中絶」

原因と対策

桜沢 信行 交通面からみた中港関係の発展

澤田 快介 シンガポール経済の確立

志澤 千恵 閔妃殺害事件——暗殺者たちの思惑——

新谷 剛 女性革命家王秋瑾について

金玉均暗殺事件と日本——故金氏友人会の活動を

中心に——

関 治子 古代の女性観

高橋 健 三・一独立運動の新聞論調——朝鮮統治改革を中

心に——

高橋 信之 香港の繊維産業

田村美枝子 同樹人の日本留学及びその経験と文芸運動及び小

説の関係

津田 誠 天安門事件以降の米中外交関係からみる中国の

「独立自主外交政策」

野澤 光子 『河殤』から見る現代中国

樋口 利明 文化大革命初期における紅衛兵・民衆の心理

藤井 力 現代中国社​​会における官倒問題

古橋 幸子 楚国における巫の特異性について

堀田 博章 安重根の思想と行動——愛国啓蒙運動から義兵運

動へ——

堀内 史穂 「旅」司馬遷のたどった道

森元 美枝 中国の作文教育の傾向について（思想教育を中心

として）

森本 裕子 一人っ子政策から生まれた「ヤミっ子」と「四・

二・一っ子」

安田 政晴 中韓交流（中国、韓国の接近と発展）

山口 秀明 新羅密教の再検討

山崎 泰久 関東大震災と朝鮮人虐殺事件——埼玉県北部にお

ける自警団の行動

和知 直子 文革と出身血統主義

曾根 伸介 中国の匪賊について——その発生から消滅まで——

中嶋 正貴 韓国自動車産業の発展過程

庭山 孝代 改革・開放政策後の大学教育と青年

吉本 圭介 東洋医学・中国の針治療

近藤 隆司 靖国問題を批判した中国

中村 祐介 韓国プロ野球が発展するためにある問題点の改善策

大和 麻子

改革・開放政策下における中国農村女性の意識変化

藤原 健一

中国における体育とスポーツ

小島 寛和 哀世凱死亡時における日本の新聞論調

九月卒業者

石田雄一郎 肥後人気質から見た滔天像の一考察——三十三年の夢を中心にして——

篠原 政志 台湾の自動車産業 国豊汽車計画が与えた影響とその後

中村 彰秀 台湾戒嚴令解除——蔣経国の特質からの一考察

### 文明南アジア課程

荒谷 千穂 空の思想

石井 由理 唯識思想とユング分析心理学

乾 武史 スペース・チャンドラ・ボースのインド独立の理念

牛島 章 インドにおける食生活

大石 明生 クリシュナムルティの思想形成——なぜクリシュナムルティは「星の教団」を解散させたのか——

大島 豊司 インドにおける牛——プリーム・チャンドの小説を通して——

小澤 敬 アジア諸地域における仏教壁画の特徴と比較

小林 夏乃 クリシュナの発展とその要因とは

下田秀一郎 カースト制度とアンベードカルの新仏教——その思想的対立——

鈴木 葉子 古代インドにおける女性観

新里 優子 仏教における女性観

橋本 寿美 カースト社会における不可触民の実態と将来の展望

濱中 茂 インド国民軍の組織と軍事行動についての一考察

表木 和茂 インド音楽の変遷

松葉 和紀 タゴールの教育理念について

向笠 高弘 カリーに仕えたタグ

山田 伸子 インドにおける牛崇拜の歴史

新田目次郎 サルボダヤ・シュラマダーナ運動

渋谷 高明 穀類の調理法と地域から考えたインドに於ける食文化

矢野隆太郎 文明と文化

## 文明西アジア課程

井上 篤史 イラン立憲革命における「立憲的な大衆」と「保守的な大衆」

岩月 宏之 サファヴィー朝の貿易について

奥田真由美 古代エジプトの衣装（コスチューム）

香川 緋穂 中世後期のカイロにおける文民エリートの特徴

金森 恵理 古代エジプト中王国時代の彫刻について

北爪 美夏 「エウリヤ・チェレビ旅行記」の叙述の特徴について

清水真寿美 古代エジプトの犁について

新川 奈緒 十九世紀のナイル川灌漑システムの展開

鈴木 純一 サファヴィー朝と西欧

高橋 美穂 十九世紀エジプトにおける私的土壌所有権の確立

過程

田中 秀樹 トルコ独立運動の展開 主にサカリヤの戦いを中心として

鶴森 佳子 ハトホル女神に投影された偉大なる女性の姿

中村 友美 イスタンプルの復興

広池 有紀 古代エジプト中王国時代の宝石について

藤原 和美 イブラヒム・ミュテフェツリカと印刷機の導入に

ついて

横田 晶子 イランの新年祭——Jash-e Nouruz の諸習慣

杉枝 徹 パレスチナ民族意識とPLO——第三次中東戦争を中心として

福井 祥文 イランの古典音楽

村越 浩二 タバコ・ポイコット運動について

九月卒業者

中藤 和生 エナメル彩モスクランブ

青島加代子 Arabian Horse Breeding

目黒美奈子 中世エジプト・マムルーク朝における軍隊構造の変遷

山中 信子 サフランボルの民家

## 文明東欧課程

芦川 高峰 KTBの歴史と組織構成

安達 英治 ペレストロイカと経済

内田 哲義 スターリン体制について

生沼 恵子 フス戦争と宗教改革

大橋千絵子 チェーホフ——戯曲「三人姉妹」の一考察——

尾崎 桂子 リトアニアのソ連併合に関する諸要素について

笠井 幹夫 チェコスロヴァキアにおけるドイツ人問題



加藤 知子 ミハイル・ゴルバチョフ

川口 善朗 現代ソ連史におけるスターリンの功罪

久保 修 ソ連の改革——民主化への道——

斉藤 真也 カレル・チャペックの作品とその時代背景

佐藤 光代 フルシチョフの教育改革

柴田 明宏 スターリンの独裁政治

杉浦 英一 宗教改革の先駆——ボヘミアのフス——

高橋 邦夫 T・G・マザリクのチェコスロヴァキア独立運動と建国の理念

瀧 永里加 ロシアにおける工業発展

田口 華子 第一次世界大戦参戦に於ける、ロシアの目的と諸情勢について

中野弥寿徳 チェコ旅行者から見た明治日本

長岡 万里 ウクライナにおける言語の歴史

長崎 秀紀 カレル・チャペックの与えた社会的影響について

長谷川愛美 古典派・ロマン派の音楽——モーツァルト、ベートーヴェン、ショパンをめぐって——

松谷 陽子 ラスプーチンの能力

広江 尚美 社会主義におけるソヴィエト音楽——ロシア革命は芸術に何をもたらしたか——

深見有佳子 歴史的見解による「青銅の騎士」

増淵 聖子 北方領土問題の解決を模索して

森 万里子 昔話にみられるロシアと日本の民族性の比較研究

山下 大輔 ゴルバチョフとベレストロイカ

結城 理佳 ショスタコーヴィチ——スターリン時代に見る音楽環境——

吉川 和光 二十世紀における社会主義——スターリンからゴルバチョフへ——

吉田 祐子 日ソの歴史を背景に北方領土問題の現状を探る

米本佳津代 東欧革命における民衆思想について

池田 真一 オスマン帝国支配によって生じたバルカン諸民族のジレンマ

新木 伸和 ソ連・東欧における現代諸問題

朝長 正康 第一次世界大戦前までのバルカン半島における民族運動と列強の介入

山本圭一郎 ハンガリーの自然とマジャール人の生活と文化について

阿藤 博克 高速道路としてのアウトバーン

飯田 孝子 ヘーラクレス像の変遷

圓藤 康範 ベルリンの壁崩壊

大山 麻理 ドイツ人の日本人像——教育を通して——

岡田 年博 時代に生きる新興宗教

沖田 純子 宗教改革と教育改革

### 文明西欧課程

小山田咲子 グリム童話——その時代的背景と道德観——

影山 真美 マヤ文明のセンター構造

加藤 光治 ベルリンの壁崩壊による経済・通貨統合の実施

川口利恵子 初期キリスト教における造形表現——カタコンベ

を通して永遠の生命について——

熊澤 孝枝 Iconoclasm への漸次的アプローチ——Iconocla-

sm 研究の方向性の考察——

黒瀧 博也 アメリカ冒險活劇映画のヒーローについて

小林 清志 東西ドイツ及び統一ドイツのスポーツ

小見 悦子 エイズと文明

坂 和実 光の芸術——宗教遺産

定本 京子 統一ドイツのアイデンティティ

柴崎 圭 ローテンスの起源と展開

志摩 薫 アインシュタインの素顔

霜崎 千里 一八六七年パリ万国博覧会とジャポニスム

白田 祐子 アインシュタインを陰で支えた女性ミレーヴァ

杉原 崇之 再統一におけるドイツの諸問題

平 賢 テニス選手の育成と組織

田口 聡子 サンピエトロにおけるピアッツァ（広場）につい

ての一考察

鳥羽乃里子 砂糖生産と森林破壊

丹羽 正治 零戦とヘルキャット

檜垣 良子 エーゲ海美術における壺——クレタ美術からミュー

ケナイ美術への影響——

伏見 尚志 ヒトラー政権誕生における要因とその時代背景

——ナチズムを支えた社会的基盤——

星野 聡 今日における企業のエコロジーマーケティングに

関する対応

増田 吾子 イギリスにおける妖精と日常生活の関係——キャ

サリン・ブリックスの分類をもとに——

松村 靖子 ヴィクトリア朝のジェントルマン精神

水田 芳 十字架——崇拜とその重要性——

宮下 洋子 十三世紀イタリア絵画の転換

山口 哲生 西欧と日本の住宅政策

山田 恵子 ケルト的装飾術とその文様

山梨 剛生 西欧ブランドと日本のブーム

横田奈津子 なぜ彼女は西アフリカへ行ったのか——メアリ

ー・キングズリーの人生を追って——

吉田 真紀 フランス革命とナポレオン

渡辺 敦子 ポツティチエリ

西本 浩 「魂」とは

和田 香織 キリスト教絵画における聖母子像

安西 優子 ナチス統治下における女性の立場・位置づけ

石野 有紀 ルイ十四世下における宮廷女性の結婚観とその背

景 内 建二 ベルリンの壁崩壊による統一ドイツ経済の行方

榎本 圭子 ワーグナーとニーチェの關係

大津佐代子 中世の影に生きた死刑執行人の市民権を得る時

岡田 衣子 中世におけるスパイス文化とサヴァランの美食

小川美代子 「魔術」——その起源と『ボイマンドレース』

長村 静香 バレエ芸術におけるポワントの美

鍵和田純子 十六・十七世紀にヨーロッパの魔女裁判が残した

もの

片野 郁代 ヒューマニスト・モンテーニュ——『エッセー』に

おける徳の概念をめぐって——

蒲野 成治 ルター『九十五条の論題』の真意

亀井 資子 洋画における原画とヴィジュアル・コミュニケーション

シヨン論

川名 朋樹 森田とフロイト

久保 佳代 ティル・オイレンシュピエゲルと庶民の生活

小杉 充彦 南北戦争の背景

小林 佳子 古代ギリシアにおけるスポーツ——スポーツを位

置づけるものは何か——

阪本 明恵 捕虜

佐藤 律子 ヒトラー政権下に生きた少女アンネ・フランク

重原 和彦 フィリップ社の歴史とヨーロッパ

白川恵理子 人類的観点からみた文明

杉田 裕美 ヴィン・セント・ヴァン・ゴッホの作品における

変遷について

須藤可奈子 昔話における挿絵の功罪について——グリムの

『白雪姫』を取り上げて——

高橋 健 ヤヒ族の進化から見た人類の進化

滝 裕子 受胎告知

竹馬 潤子 マリー・アントワネットの実像

友寄 正明 「パンセ」におけるパスカルの幸福論的思想

中村 兼一 バルガスの功績

中村 裕一 教育における女性の立場——近・現代イギリス——

西村 和恭 スタンダールは死をどうとらえていたか

濱本 純弥 フォルクス・ワーゲン・ビートルは何故売れたの

か

平松 公恵 パウロとコンスタンティヌスの回心——迫害者か

らキリスト教徒への経過をたどる——

藤田 悦子 日系移民の歴史と日米関係

古川八州男 ヒトラーの人間性

堀内 恒志 ラテン・アングロ両アメリカの黒人奴隷制の比較

水谷 昇 インディアンの宗教運動

室園 主税 西ドイツ人の生活と社会

山田 恭司 レオナルド・ダ・ヴィンチ

山田 昌弘 ドイツの森林と酸性雨問題について

横田 光子 キルケゴールの「愛」とは？

吉田 瑞枝 *compenons la vie*

渡邊 朋呼 十九世紀以降に見る衣服の民主化

志方 篤起 オウイディウス「変身物語」における変身と神罰  
の考察

水元 久人 十九世紀前半の料理

岡 富美雄 人間的時間論——アウグスティヌス『告白』第十

一卷を中心に——

井ノ崎隆一 コメディア・デウルテにみる文化の大衆性

岩本 健一 スポーツの発展と歴史的背景

寺内 正起 チャールズ・スペンサー・チャップリンの映画に

見るメッセージについて